

新たな食料・農業・農村基本計画の策定に向けた公開討論会（名古屋）概要

日 時：平成22年2月13日（土） 13:30～

場 所：CBC（中部日本放送）ホール（愛知県名古屋市）

〈概要〉

1. 基調講演（赤松大臣）

- ・ 基本計画には自給率、食の安全をどうするかということ盛り込んで3月には発表したいと考えている。
- ・ 世界の食料事情は深刻。人口が増え、食料危機が深刻。今、世界の紛争原因で一番多いのは食料を巡ること。安い食料を買えばいいという時代ではない。
- ・ アメリカ、ヨーロッパでは自国の農業を守り、自給率を向上させるために所得補償制度を導入している。先進国は自国の農業を守り、拡大することによって、高い自給率を維持し、自国の食料の確保をしている。そのために、農業に所得補償を導入することは先進国では当たり前であり、日本も今般導入したところ。
- ・ 食料をめぐる国際的問題も課題。人口が10億人に増え、食料危機が叫ばれており、飢餓人口が増えている。国際協力も行っていくが、我が国の自給率は先進国で最低の41%であり、10年後に50%、20年後には60%を目指し、引き上げていく。その目標を基本計画に示す。
- ・ まぐろやくじらのような水産資源枯渇問題の対応も大きな課題。
- ・ 余った水田で米粉用米や飼料用米、飼料などを生産し、米粉として消費したり、家畜の飼料を国内で生産することにより、自給率を上げる。
- ・ 地方の農業は高齢者や兼業農家に支えられている。戸別所得補償制度により、中山間地域を支えている小規模農家が農業で生活が成り立つような体制を構築する。
- ・ 「地産都消」という考えに基づき、消費者に安全で安定的に食料が供給できる体制にする。
- ・ 環境を大切にすることが農業の再生につながる。
- ・ 賢い消費者、理解のある多くの団体や企業と連携しながら、自給率の向上ほか農業の再生問題と取り組んでいく考え。

2. パネルディスカッション第1部

食料自給率、戸別所得補償、食の安全・安心について討論。

食料自給率については、生産者の努力だけではなく、消費者の理解と協力が必要であることについて意見がだされた。

戸別所得補償制度の導入については、一定の評価があった。

食の安全・安心については、国民の命を守るものであり、食育により農業の大切さを教えることが重要であるとの意見が出された。

主な発言、意見は以下のとおり。

- ・ 食料はスーパーで買うものとなり、農と食がかけ離れている。
- ・ 2年で3作することにより安定的な食料を生産している。
- ・ 農業がいかにか夢と希望がある職業であるか、ということを示すことが重要。
- ・ 消費と生産をつなぐことにより、生産者を支えていきたい。飼料についても自給率を高める取組を一緒にやっていきたい。
- ・ 輸出規制があり、食料が買えない、えさ、燃料、肥料が高騰したが、農産物の価格が上がらないのが現実。消費者にも支えていただきたい。日本は先進国の中でも農業に対する予算が少ない。
- ・ 農業だけが頑張るのではだめ。所得が補償されなければ若い人は就農しない。
- ・ 大規模化にはコツはないが、基盤整備を行い、効率化を図り、国の指導で次の世代につないでいくことが不可欠。
- ・ 食の安全・安心は国民の生命を守ってくれているもの。消費者が安全とはどういうことかを理解することが必要。生産者との信頼関係を作ることが重要。
- ・ 農家が喜ぶことは儲かることが第一。
- ・ 地域で成り立つためには、農業に関する理解を深める食育が重要。農産物がどのように作られているのかを体験することが大切。
- ・ 子どもの頃に本物を食べることが重要。学校給食でちゃんとしたものを食べさせることが大事。
- ・ 味覚は記憶の引き出しの数。小さい頃からおいしいもの、本物を食べさせることにより養われる。

(大臣まとめ)

- ・ 農業・農村の問題は消費者の問題であることを理解してほしい。
- ・ 国内で消費するもの、生産できるもの、特に大豆、麦、米粉用米、飼料米などは耕作放棄地を活用して、生産していきたい。
- ・ 良いものはそれなりの値段であるということを理解して、多少高くても購入してほしい。

(パネリストまとめ)

- ・ 中日新聞に「農は国の本なり」という特集があったが、国として支えるもの。
- ・ 日本の食料、農産物は安すぎることを理解してほしい。イタリアのスローフードのように生産者と消費者が相互理解できる環境が必要。
- ・ 生産者が再生産、持続可能な価格にして欲しい。地産地消が基本。
- ・ 消費者は買いやすく、生産者は農業の再生産可能な価格設定が必要。補助金は農業者のためだけでなく、消費者のためでもあることを理解してほしい。

3. パネルディスカッション第2部

(有)レイク・ルイズ(岐阜県海津市)の堀田代表取締役から、岐阜県特産の米「ハツシモ」の米粉を100%使用した麺「ベーめん」について、開発のきっかけから今後の展開方向(地域一体型の取組でさらに販路拡大)等を紹介いただいた。その後、6次産業化をテーマに、地域で成果をあげてきたパネリストの成功体験を紹介し、今後地域が元気になるための展開方向について討論。

主な発言、意見は以下のとおり。

- ・ 日本のパスタは世界に冠たるものだ。しそパスタ、たらこパスタは、外国にはない。こうしたものには米粉の麺が合うのではないか。米粉ならではの商品になる。
- ・ JA職員だった時代、量販店に持って行けば収入になった。ある時、それでは下請けではないかと気づき、自分たちで加工までやれば飯が食えるじゃないかと考え、加工・販売を始めた。
- ・ 地域のおばあさんのたくあんが美味しかったから、農村レストランで提供し始めた。毎日車が何十台も来るようになった。自分たちの地域には何もなかったのに、ええとこやったんや、皆を喜ばせる物があつたんやと気づいた。
- ・ まちおこし・村おこしは、地元の人が楽しみながら、自分たちから行動を起こして取り組むことが大事。
- ・ 消費者は、親から習った調理の仕方しか知らないなので、元の食材を美味しく食べるレシピを付けて農産物を紹介してほしい。
- ・ レシピを講習会で知るだけでなく、一步踏み出て、農家を訪ねて生産された場所を知ることが大事。これが一番美味しい。
- ・ 生活様式が変わったので、今の子どもたちはおばあさんの味を知らないが、そういうものを今、体が求めているのかもしれない。
- ・ 食べ物はその土地の空気も含めてのもの。リピーターになることや懐かしさを覚えるのは、DNAにあるからではないか。そういうものを引き出せば、週末に農村訪問など日本人の行動様式が変わるとともに、経済効果もある。レストランに行きたい、次は宿泊したい、やがて住みたい、という流れが期待できる。
- ・ 農家は食べ物を作る機械ではないのだから、「顔が見える」ことがとても大事。
- ・ 食育は、食の成り立ちを体験しながら学習すること。これにより、食料にいくら支払うべきなのかが自然と分かってくる。
- ・ 東海地方と言えば車。山間部もある。移動性が高く農村に行きやすい東海地方の特長をどう活かしていけるか。
- ・ 6次産業化といっても、まずは1次部分がしっかりする必要。次世代に農業に就いてもらう必要。そうでないと、2次、3次に行けない。
- ・ 「あの地域に行ったらあれが食べられる」という売りを作るとともに、情報発信をうまくしていく必要。

- ・ 地産地消も大事。また、「ここに来ないと食べられないよ！」というものを作ってほしい。わざわざ食べに行く。子どもたちに、日本に農業という最高の成長産業があることを教えてほしい。食べ物も育てるが子どもも育てないと、日本の農業は再生しない。

(参考) パネリスト等

ファシリテーター等

勝谷 誠彦 (コラムニスト) (第1部・第2部ハ°ルデ イスカッション・ファシリテーター)

大石 邦彦 (CBCアナウンサー) (司会進行)

パネリスト (第1部)

赤松大臣

大倉 久徳 (平原地域営農組合 組合長)

木村 修 (農事組合法人伊賀の里モクモク手づくりファーム 社長理事)

池野 洋子 (名古屋勤労市民生活協同組合 組合員理事)

鈴木 宣弘 (東京大学大学院農学生命科学研究科教授／食料・農業・農村政策審議会企画部会長)

パネリスト (第2部)

堀田 茂樹 ((有)レイク・ルイーズ 代表取締役)

北川 静子 (農業法人せいわの里 代表取締役)

木村 修 (農事組合法人伊賀の里モクモク手づくりファーム 社長理事)

池野 洋子 (名古屋勤労市民生活協同組合 組合員理事)

(以上)